

親フェミニズム的に聴き取り大衆的に運動する： 米国・英語圏男性性研究と日本男性学の研究 動向比較からみる男性性変革運動の課題

海 妻 径 子

1990年代以降、学問として体系化され大学教育プログラムに盛り込まれていくようになった英語圏とりわけ米国における男性性研究は、エンパワーを重視するフェミニズムの影響を受け、男性研究者・教員と研究対象者男性・男子受講生との間の差異と権力関係に着目し、「研究対象者男性および男子受講生の反セクシズム的エンパワー生み出す研究」となることをめざし展開した。他方で日本では、ジェンダー研究において男性研究者が研究対象者女性を客体化し、パターン化にふるまうことへの警戒から、研究者はジェンダー・カテゴリーを同じくする者を研究対象者にすべきであるという当事者主義が、フェミニストの間にも強かった。その結果男性学は「男性研究者による当事者研究」として、女性研究者からも男性研究者からも定義されていった。このような日本の男性学およびそれと結びついた男性運動は、研究対象者男性のエンパワーよりも彼がもつ「実感」の尊重が重視され、加害者性に向き合うことと被害者性に向き合うことを二項対立的に捉えて、どちらに先に向き合うかという時間軸上の前後の問題として議論してしまうため、親プロフェミニズムの視点にたった男性性変革を提起できていない。本質主義的に「男性大衆の実感」を想定してしまうこと自体が「ヘゲモニックな男性性」の一部であるとの認識転換が、日本男性学および男性運動の課題であると考えられる。

キーワード：エンパワー／ヘゲモニー／男性性／親フェミニズム

1. 差異ある男性間のラポールとエンパワー

筆者は既に別稿（海妻2019）にて、日本の男性学とは異なり海外の男性性研究においては、必ずしも当事者主義は重視されておらず、むしろフェミニズムやクィア・スタディーズなどとの理論的・人的交叉を前提とし、親フェミニズムであることを学問としての自己規定に含める「CSMM（Critical Studies on Men

and Masculinities / 男性（性）批判研究）」が、盛んであることを指摘した¹⁾。この別稿での議論も踏まえつつ本稿では、このような男性学／男性性研究の展開の違いが、どのように生み出されたのかを検討するとともに、男性性研究が今後の日本のフェミニズムにおいて担い得る役割について、論じていきたい。

まず日本以外の状況から、検討していこう。そもそも男性性研究が、個別の研究成果が散見されるに留まるのではなく、学問として体系化され大学教育プログラムに盛り込まれていくようになるのは、男性性研究の先進地域である米国においても1990年代、とりわけ後半に入ってからと言える（Newton 2002）。この過程は、当然のことながら多くのフェミニストの警戒と疑念を喚起したが、Pini & Pease (2013)によればその際にとりわけ論点となったのは、「男性に『フェミニスト研究』が可能か」という点であった。

確認しておかねばならないのは、この際に問題となったのは、「女性としての被差別経験を持たない男性が、（女）性差別を理解し分析することは可能か」ということではなかった、という点である。既にウーマニズムや第三世界／ポストコロニアルフェミニズムによる西欧白人中心主義批判、ポストモダンフェミニズムやクィア・スタディーズによるアイデンティティ本質主義批判およびシス異性愛女性中心主義批判がなされており、女性身体を持ち主でありさえすれば多様な女性の多様な被差別経験を理解し分析することができる特権的立場にいと、単純に主張することはもはやできなくなっていた（Wiegman 2002）。しかも、女性間の権力関係を問題化したこれらの批判によって、研究者と研究対象との間の権力関係もまた問われていった。フェミニスト研究とは、研究対象の「女性」（シス異性愛女性のみならず、家父長制における被差別経験者）の経験を研究者が搾取するのではなく、研究されることを通じて研究対象の「女性」がエンパワーするものでなければならないと、考えられていったのである（Pini & Pease 前掲）。

したがって「男性に『フェミニスト研究』が可能か」とは、そのような研究対象者すなわち家父長制における被差別経験者が、研究者と研究対象者という非対称性にさらに、ジェンダーの非対称性が加わるにもかかわらず、男性研究者による研究を通じてでもエンパワーされることはあり得るか、という問題に他ならなかった。とりわけ、研究者からの質問に自らの経験を再構成して回答する過程が、研究対象者にある種のコンシャスネス・レイジングを生じさせ得ると考えられる、聞き取り調査を研究方法として採用する男性研究者に対し、その厳しい問いかけは突きつけられた。この問いかけと格闘したMark Jones (1996)は、男性がフェミニスト研究をするためには、研究者が女性であるかのようにふるまうのではなく、男性として抑圧してきた自らの側面を解放し、かつ自らの調査分析を女性たちの批評にさらすことによって、自らがジェンダー・ニュートラルではないこと

に意識的であり続ける必要があると、結論づけている。不可視化されている「男性性の多様性」を明らかにすることは、研究対象者がエンパワーするような質問やラポール形成を男性研究者がなし得るために、男性研究者自身がジェンダー化された主体としての自らの立ち位置と向き合うためにこそ、必要とされたのである。

他方でこのようなエンパワーメントの重要視は、家父長制における被差別経験者をその「被害者性からエージェンシーへ (agency over victimhood)」着目し捉えようとする傾向を、男性を研究対象とする男性学・男性性研究においてももたらしたと、Judith Newtonは指摘する。Newtonによれば、米国を含む英語圏の親フェミニズム男性性研究においても当初は、男性たちが自らの被害者性についてフェミニズムからの批判を受けずに議論できる場が必要だと考える、分離主義的傾向がみられた。だが80年代末頃より、男性もまたその被害者性よりもエージェンシーに着目して議論されるべきであり、家父長制の中で男性自身が反セクシズム的なエンパワーをするためにこそ、フェミニスト理論を参照することは必要である、という主張がHarry Brod, Alice Jardine & Paul Smith, Michael Kimmel, Michael Awkwardらによって展開されるようになったという (Newton 前掲)²⁾。

親フェミニズム男性研究者が、彼自身よりも階級やエスニシティにおいて周縁化されていることの少なくない性差別・性暴力加害男性に対し、ラポールを形成しつつもホモソーシャルに回収されず、研究対象者の反セクシズム的エンパワーを生み出すような研究は、いかにして可能なのか。研究方法論の模索が蓄積されていくとともに³⁾、90年代に入って男性性研究が大学教育プログラムに組み込まれていくと、共同研究者や研究交流者としての協力関係だけではなく、教育者同士としての協力関係が、男女の男性性研究者の間に拡大していく (Gardiner2002)。とりわけ米国においては、既存の各学問領域にジェンダー視点を取り入れていくよりも、女性学やジェンダー・スタディーズという複合的だが独立した学問領域として、大学教育プログラムを構築していくことが多かったとされるが、そのような中で男性性研究は、既にフェミニストの女性教員達によって開講されているジェンダー・スタディーズ・コースのカリキュラムの中の1科目、あるいはひとつの科目の中の数コマ分の授業内容として組み込まれることがほとんどであった⁴⁾。したがって、彼女達との良好な協力関係を築くこと抜きに、男性研究者が男性性研究の授業を開講することは困難だったと考えられるのである。

男性性研究が大学教育の中にどのように組み込まれていき、その過程でどのような男女教員間での協力関係が築かれたのか。またどのように女性教員が、自らの研究関心をも男性性研究に向けていくようになったのか。さらには男子 (とい

うジェンダー化された) 受講生に対する男性性研究のペダゴジーが、男女教員(という、受講生とは権力関係において非対称でありつつ、ジェンダー化もされている存在)それぞれにおいて、どのように異なった模索をされていったのかは、Robinson (2002) や Brod (2002), Landreau & Murphy (2011), Sommer (2013), Scmitz & Haltom (2017) などを通じて知ることができるが、紙幅の都合により本稿ではこれらの詳細には踏み込まず、以下の点のみ確認しておきたい。すなわち、男性性研究における「男性性の多様性」への着目とは、「女性フェミニストが見落としがちな、男性の被害者性」への着目を超えてむしろ、男性研究者と研究対象者男性との間、あるいは男性教員と男子受講生との間に横たわる、差異と権力関係をあぶりだし、それを踏まえた上でいかなる反セクシズム的エンパワーを研究対象者男性や男子受講生に生み出し得るのかという模索として、少なくとも米国およびその影響を受けた英語圏においては展開した、という点である。この点を踏まえなければ、なにゆえに2000年代に入り次々刊行されるようになっていった、Reeser (2010), Buchbinder (2013) のような大学生・院生向け教科書・入門書において、男性性研究がフェミニズムからいかに大きな影響を受けたかについての明確な言及があるのが常であり、中には Kahn (2009) のように、男性性研究の源流としてフェミニズムを概説するところから書き起こすものすらあるのかを、理解することはできないであろう。

2. 日本男性学の当事者主義を生み出したもの

次に、日本の男性学における当事者性の重視が、どのように生み出されたのかを検討していく。

日本の男性学における当事者性の重視が、女性学による男性・男性性の「過剰な一般化…「男というものは生来的に暴力的で支配的な性だ」というステレオタイプ」(伊藤 1996) に対する男性たちの違和感から生み出されたことは、これまでも指摘されてきた(川口 2008)。さりながら、90年代における「女性学のゲッター化」への対応をめぐるポリティクス、およびメール・フェミニストの「代行主義」への反発もまた、日本において当事者性重視の男性学が生み出されていった背景として、看過することはできない。

90年代は、その担い手の4割が非常勤講師であったとはいえ、大学での女性学およびその関連科目の開講が拡大していった時期であった(渡辺ほか 2000)。他方で、とりわけ既に80年代半ばには長谷川博子によって、「女・男・子供の関係史」への「発展的解消」が提唱されていた女性史分野においては(上野 2002)、1992年に Joan Scott の『ジェンダーと歴史学』の邦訳が刊行されると、

ますます「女性史のゲッター化」への懸念が強く表明されていくようになる。90年代初頭に大沢真理・中川スミらの間で展開された「家事労働論争」もまた、女性学的視点を経済学という既存学問に持ち込む困難さを、顕在化した。北京女性会議開催や選択的夫婦別姓制度等を盛り込んだ民法改正要綱試案発表などの気運を逃すまいと、「社会政策におけるジェンダー主流化」が課題として浮上したこともあり、「女性学からジェンダー研究へ」の転換は急速に進行した（江原2000）。

だがこの転換は、大学生の女性比率が男性を上回り（安東2016）、大学教員の女性比率も2割に達していた（橋本2001）80年代後半の米国において進行した際にすら、フェミニズム視点の後退をもたらしかねないとして、物議を醸すものであった。そのような転換が、より女性がアカデミズムにおいて周縁化されている日本にて進行したとき、企図された「男性も巻き込んでのジェンダー主流化」につながる以上に、男性研究者に「新奇でエキサイティングなテーマ」として女性を対象化・客体化する口実（荻野2002）を与えかねないことは、当然危惧されることだったのである。

多賀太は、メンズリブ研究会の発足や大阪メンズセンターの設立など、90年代前半における男性学・男性運動の始動をもたらしたもののひとつに、1989年の日本女性学研究会例会での討論会「男はフェミニストになれるか」において「関西でフェミニストの女性たちと一緒に活動してきた男性たちが、彼女らとの議論を通して、男のことは男が当事者として自分たちで考えていく必要があること、…「男らしさ」によって抑圧され傷つけられてきた男性自身の経験や実感にも目を向けてもよいことを再確認」したことを挙げているが（多賀2019 p.23）、ジェンダー研究やフェミニズムをいかに「ゲッター化」させずに、かつ女性の再客体化を避けるかは、日本女性学研究会に限らずこの時期の女性学の女性研究者や女性アクティビストの、高い関心を集める事項であったと言って良いだろう。男性がジェンダー・イシューやフェミニズムに関わる際に、いたずらに女性を研究対象にしたり称揚や啓発の対象にするのではなく、まずは男性自身を研究や意識変革の対象にせよという主張は、男性研究者・アクティビストからの声としてもさりながら、女性研究者・アクティビストの要求として存在していたのである。であればこそ、アカデミックな男性性研究が十二分に蓄積されていない90年代後半に早くも、『日本のフェミニズム 別冊 男性学』（井上ほか1995）や『共同研究 男性論』（西川・荻野1999）のような書籍が、女性研究者を編者として刊行されたのであり、また『男性改造講座 男たちの明日へ』（足立区女性総合センター1993）、『男が語る家族・家庭』（豊島区立男女平等推進センター1994）のような女性センターおよびその関係者の編集による男性性変革運動関連書も、出

版されていったのである。

当事者性の重視は「女性学からジェンダー研究へ」の転換が進む中で、女性が再客体化されないための防波堤の意味を持っていた。上野千鶴子は、「女性学とは…男性中心的な視点から、女性を主体として奪いかえす試みだった。男性学とは、その女性学の視点を通過したあとに、女性の目に映る男性の自画像を通じての、男性自身の自己省察の記録である」（上野 1995）と述べ、これは日本男性学の定義として現在に至るまで強い影響力を持っているが、ここには「男性学を当事者研究として定義することを、非当事者がおこなう」という矛盾がある。のちに齋藤圭介によってこの点を指摘された上野は、「わたしと共編者たち（全員女です）は、わたしたちがそう判定したものしか「男性学」と認めない、という「正統化の権力 authorizing power」を行使しました。…だがそれは、男性学にとっての「当事者の党派性」を冒すことになるのではないか、という批判はもっとも」と認めている（上野 2011, p.129）。しかし重要なのは、何ゆえに上野がそのようなことを迫られたかであり、それについて上野は「ジェンダーはフェミニズムが生んだ権力のカテゴリーです。…そして男性学は、このカテゴリーをフェミニズムから学んだことに自覚的であってほしいと思います」（前掲, p.131）と述べている。ここに現在に至るまでの、女性が再客体化されることへの危惧の日本における高さを、読みとることができるのではないだろうか。

この上野による男性学の定義づけとほぼ同時期に、『〈男らしさ〉のゆくえ』（1993）、『男性学入門』（1996）を著し、日本における男性学の牽引役を担った伊藤公雄は、メイル・フェミニズムとメンズ・リブを区別した上で、前者について次のように述べる。「これらの男たちは…女たちとともに、現在の男性中心社会を変えようとする善意の男たちであると思う。…しかし、こうした男たちのなかには、しばしば女性問題の重要性に目を奪われるあまり、自分たちのかかえこんだ男性性のもつ、男に対する抑圧性を等閑視する男たちも存在している。しかも、ときには代行主義的に…男たちを、女の立場から批判して、それでよしとする傾向が見られることさえあるといってもいいだろう」（伊藤 1993, p.182）。次章でもあらためてふれるが、このようなフェミニズムへの男性の代行主義的な関り方に対する批判は、米国をはじめとする欧米諸国においても存在した（Haywood & Mac an Ghail 2003）。だがいわゆるアイデンティティ・ポリティクスの時期を経て、社会諸運動間のインターセクショナルリズムの重要性が叫ばれるようになった90年代後半以降は、ally や engaging など代行主義的ではない男性のフェミニズムへの関り方（およびそれを含む、非当事者による社会運動への関り方）を表現する用語が、模索され散見されるようになる⁵⁾。だが日本においては、男性性変革運動がインターセクショナルに他運動とつながる間もないまま⁶⁾、2000年

代における運動の停滞（多賀前掲）へと至り、男性のフェミニズムへのあるべき関り方をめぐる議論およびその関りを表す用語の模索は、管見の限り十分に行われぬまま今日に至っている。

興味深いのは、伊藤が大学生の頃に、運営に携わった学園祭で起こった女性差別問題について「糾弾」され、しかも糾弾する側にいた「男性」から暴力を受ける経験をしたことが、のちに男性学を始める原点になっていることを吐露している点である（伊藤 1996）。よく知られているように、欧米諸国においては男性復権運動が盛んであり、ゆえにそれを批判するフェミニズムや親フェミニズム男性運動、とりわけラディカル・フェミニスト（女性のみならず男性アライを含む）による性暴力批判は、しばしば行動主義的な傾向を帯びる。だが伊藤が記述しているような、『『積極的な男性復権論者』ではない者に対する、男性による代行主義的な暴力』をめぐる議論は、寡聞にして少なくとも 90 年代以降の英語圏の男性性研究においては、ほぼみられない。女性差別の加害者を自分以外の「封建的」あるいは「ブルジョア的」な「遅れた」男性とみなし、自らは女性運動に対するパターンナ理解者として、ときに暴力的に振舞って疑問を持たない傾向が、いかに日本の社会運動や批判理論に携わる男性に根強くみられたかの証左が、伊藤の記述なのではないだろうか。

このような批判理論男性研究者・男性アクティビストの代行主義あるいはパターンリズムの根強さゆえにこそ、日本の女性学においては後々まで、「封建遺制」や「家父長制」概念が繰り返して議論されねばならず、一見「民主的な」近代家族の性差別性を衝く落合恵美子・西川祐子・牟田和恵らの近代家族研究が、大きなインパクトを持つことになる（上野 1990, 同 1994, 千田 2011）。他方で、自らを問わぬままに「他の男性の加害者性への糾弾」に走るよりも、ときに「男性の被害者性」を感じる自分」をも含め、自らを男性主体として引き受けることから男性変革は語られるべきとする、伊藤の代行主義批判には説得力があったのであり、インターセクショナリズムよりもまずは当事者運動あるいは研究、という日本の男性学の志向性も、この文脈において理解することができるのではないだろうか。

3. 親フェミニズムの根源性

いかなる研究も、それが展開される社会の文脈を無視することはできない。米国と日本それぞれの男性学・男性性研究は、それぞれの社会の文脈の違いによって異なる展開をするに至ったのであり、他国のような展開をすべきであったとできるはずなどと、安易に主張するのが本稿のねらいではない。しかしながら研

究動向の国際比較は、自らの携わる研究の偏向や未開拓分野を明らかにし、社会運動に対しその社会の文脈をどのような方向へと変えていくことが課題として残されているかを、可視化することができる。

これまで見てきたように米国を中心とした英語圏の男性性研究は、90年代後半頃から遅くとも2000年代に入って以降は、家父長制において「男性として」被差別経験をもつ者の反セクシズム的エンパワーをめざして、研究者がジェンダー化された主体としての自らのバイアスと権力性に留意しつつ行う研究、として展開してきた。研究者自身のジェンダー・アイデンティティや解剖学上の性別は分析や講義遂行に際しての重要な留意点ではあれ、学問定義自体を左右するものではない。これらの地域の男性性研究において学問定義を左右するのはむしろ、「男性として」被差別経験をもつ者の反セクシズム的エンパワーをめざす思想および実践としての、親フェミニズム (profeminism) を基底としている研究であるか否かである。

この点について最も早くから論じている研究者のひとりである Harry Brod (2013) は、研究対象となる「男性性」それ自体が常に「男性の類縁 (the families of men) の誤解された要約」としてしか存在し得ないこと、また「複数の男性性」とはそれがいかに多様であり、かつ「制度と個人の相互行為的構造」であろうとも、同時に常に家父長制でもある、と論じた上で、以下のように述べる。

実際私はかつて、pro-feminism / profeminism 概念において、ハイフンをつけるか否かの重要性について論文で言及した (1997)⁷⁾ ことがある。…人々が pro-feminism というふうにはハイフンで区切ったときには、そこにはフェミニズムは女性たちの問題であり、私たちはそれをサポートするのだ、フェミニズムには賛成だが、私たち自身のことではない、というような考え方が表れている。それに対して私の理解する profeminism とは、男性の男性による男性のためのフェミニズム (feminism of, by, and for men) である。…様々な男性の視点からの、フェミニスト理論および実践を開発していくことである…私たちが家父長制の社会に生きていることは、私には自明であり…家父長制の世界を理解するための理論と実践が、私がフェミニズムと呼ぶものである。…対照的に、フェミニズムを単なる価値観として定義する語り口がある——フェミニストが X を信じる人々だとしたら、X について異なる捉え方をしようとする他の人々もいる、というふうには。私の経験では、それはしばしば不幸な相対主義につながる。…私にとってそれはより根源的なものである。世界がどうあるべきかをどのように考えるかというイデオロギーを、私たちが獲得する以前に横たわっている、私たちが生きている世界の本性とはいったい何かについての、単純で実質的な問いなのである (p.58)。

性差別というものが「加害者としての男性」という個人／主体によってのみ生み出されているわけではなく、かといって個人に先立ち独立して存在する「性差別的な社会制度」や「性差別的な文化」によって生み出され、「加害者としての男性」がそのような社会制度や文化の操り人形なのでもなく、「制度と個人の相互行為的構造」としての世界⁸⁾。その世界を「自明に」「根源的に」家父長制として把握するがゆえに、生み出される思想と実践。それら思想と実践の中でも、世界＝家父長制の中で「男性の類縁」として誤認された個人／主体によって遂行されていくもの、それがBrodの論じる親フェミニズムである。親フェミニズムであるということは、男性が女性に謝罪することでも女性を解放することでもない。家父長制解体を人間にとっての根源的な価値とみなし、家父長制という構造に「男性として」埋め込まれかつその構造を再生産しているエージェントとして、家父長制解体のために自らがなし得る実践について、フェミニズムとの共闘はもとよりあらゆる可能性を探ろうとすることに他ならない。

日本の男性学およびその関連議論においてはしばしば、「男性が、自らの加害者性に先立ち被害者性に向き合うこと」の是非が主題化される。しかしそのような、加害者性に向き合うことと被害者性に向き合うことを二項対立的に捉えて、時間軸上の前後を議論しようとする問題構成そのものが、加藤典洋『敗戦後論』に対する論争（加藤1997、高橋2002）において顕在化したような、主体と責任をめぐる堂々巡りに、人々を投げ込んでしまう。責任を引き受けるためには、責任から目を逸らすことを通じて主体を立ち上げないといけない、というわけである。

だが社会が何かしらの権力構造である限り、加害者性と被害者性の混在としてしか人間は存在し得ないのであり、たとえば戦争責任問題をめぐっては反コロニアリズムというメタレベルでの価値づけの下に、加害者性と被害者性に同時に向き合うような主体の立ち上げが、そしてそれを可能にするような思想と運動の構築が、目指されねばならないだろう。同様に、反セクシズムとはジェンダーやセクシュアリティをめぐる問題におけるメタレベルでの価値であり、加害者性と被害者性に同時に向き合うような「男性」主体の立ち上げを可能にする思想および運動が、親フェミニズムなのではないだろうか。

加害者性に向き合うことと被害者性に向き合うことを二項対立的に捉える思考は、実のところ、「女性性」を加害者性に汚染されていない無垢なるものとしてロマン化し称揚することで、暗黙の裡に男性主体を不可視化してしまう、マスキュリニストの女性賛美と通底する。男性や男性性に対し一見「自虐」的な姿勢をとることで、男性主体が親フェミニズムを遂行し得る可能性を、果てしない時

間の先へと遅延させてしまうのである。フェミニスト思想・哲学やフェミニスト神学が女性性を再評価しフェミニンな主体の可能性を模索したように、男性性を「自虐」の欺瞞の中に放擲するのではなく、「親フェミニズムを遂行し得る男性主体」の可能性を模索する批判哲学が、必要なのだ。だからこそ近年の男性性研究においては、スピノザ人性学についてのドゥルーズ&ガタリの議論を男性主体の倫理的あり方をめぐる議論へと発展させようとする Terrance MacDonald (2018) や、感情性と男性性を親フェミニズム的に結びつけようとする Todd Reeser & Lucas Gottzén (2018), エコロジカル・フェミニズムと親フェミニズム男性性研究を接合させようとする Steve Garlick (2017) のような議論が、出現してきているのである。

しかしこのような議論そのものが、大衆から遊離したアカデミシャンによる言葉遊びである、との批判もあり得るだろう。実際、米国においても男性復権運動の広がりには比して、男性性研究の担い手を越えた親フェミニズム男性性変革運動の拡大が、はかばかしいものではないことはしばしば指摘されている。また、米国における男性研究者による男性性研究の増加それ自身が、「男性が生み出す言説」に対して男子受講生や男性読者が無自覚に抱くホモソーシャルな信頼や、男性復権論者とその男性至上主義ゆえに女性からの批判よりも男性からの批判に対してより敏感であることから、もたらされてきたことは、Newton (前掲) によって鋭く指摘されている。

「ジェンダーやセクシュアリティに違和感を持たず、関心もない…男性／女性という二分法は「自然」な差異として理解」している「マジョリティ」に対し、「何を伝えたいかよりもどのようにすれば伝わるのかを考えなければ…男性学のスタンスは「偏り」や「説教」として認識されかねない」(田中 2019 p.39) という危惧がしばしば表明される日本の男性学は、したがって米国をはじめとする英語圏の男性性研究よりも、より大衆運動志向的であるとみなすことができるかもしれない。そうであれば問うべきなのは、果たしてその志向の通り、日本の男性学が大衆運動と有機的に結び付くことができてきたかであろう。この問題を、章をあらためて、また筆者自身のポジショナリティを明らかにしつつ、論じることで本稿の結びとしたい。

4. 「男性大衆に届く語り」のポリティクス

多賀太 (2019) は、90年代を「メンズリブと啓発男性学の興隆」期と位置づけているが、筆者が男性性研究に関わり始めたのは、この時期であった。開設されたばかりの「女性学講座」で学ぶことを希望してお茶の水女子大学に1987年

に入学した筆者は、当時の女性学やフェミニズムをめぐる議論の中でも、特に『フェミニズムと権力作用』（1988）をはじめとする江原由美子の議論に大きな影響を受け、江原の言う「『働く女性と主婦との対立』という「疑似対立」」を超克するための、男性（性）こそを問題化する研究をしたいと考えようになった。90年代半ば頃には、当時は院生でのちに『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』（勁草書房、1999）の著者となる須長史生らと共に、男性性研究についての研究会を立ち上げた。基本的には院生中心の細々とした集まりではあったが、ときにメンズリブ東京のアクティビストや、既に『性別秩序の世界——ジェンダー・セクシュアリティと主体』（マルジュ社、1994）を世に出して男性のジェンダー研究者の先駆けであった細谷実などの参加も得ることができた。

1996年より大阪メンズセンターが中心となって開催した、男性運動の全国交流大会「男のフェスティバル」にも、筆者は何度か聴衆として参加し、また東京都内の女性センターのフェスティバルで男性運動団体主催による分科会がもうけられている場合にも、できるだけ参加するようにしていた。2章で述べた、日本男性学の草創とそれに対する女性のジェンダー研究者の複雑な反応を、まさに体感しつつ、知的刺激と違和感の混在する経験を重ねていた。

一体その違和感とは何だったのか、1章で述べた男性研究者と研究対象者男性との間や、男性教員と男子受講生との間の差異と権力関係をめぐる英語圏の議論を読むことで、筆者はようやく言語化できたような気がしている。90年代の日本の男性運動や男性学の社会实践においては、「数多くの男性の実感に訴えることができる、男らしさをめぐる語り口」というものが存在しているはず、であり、男性アクティビストや男性研究者はそれを実践すべき／男性であれば本質的にそのような実践を成し得るはず、であり、女性たちがそのような語り口を採用しない／実践している男性を批判することが、フェミニズムによる男性変革が成功しない原因である、…という暗黙の前提があると、筆者は感じていた。そしてこの前提は、管見の限り現在に至るまで日本の男性学に存在しているのではないだろうか⁹⁾。

だがそのような前提が置かれ主張されるとき、そのような「男らしさをめぐる語り口」が向けられる先として、階級やエスニシティ、セクシュアリティなどの差異を超えた「男性大衆」が、あたかも存在するかのようになされていることの政治性は、しばしば見落とされている。「男性大衆」を想像し、フェミニズムによる男性変革論をエリート主義的なものとして、「男性大衆」と対置させる認識それ自体が、「ヘゲモニックな男性性」の構成要素なのではないだろうか。なぜならばヘゲモニーとは常に、「大衆的なもの」のはずだからである。

男性性研究におけるキー概念「ヘゲモニックな男性性」は、言うまでもなくグラ

ムシのヘゲモニー論を下敷きにした概念である。イタリアにおける革命運動の失敗の原因を、農民層が階級利益と結びつき損ねることで生み出された反革命意識に見出したグラムシは、利害を異にし本来対立すべき階級を縦断した「大衆的な」認識にもとづく支配の正当視が、資本制へ人々を馴化していることを鋭く見抜いたのであった¹⁰⁾。ヘゲモニーとは大衆的なものであり、その打破もまた対抗ヘゲモニーの樹立、すなわちやはり大衆的なものの再構築としてのみ、成し得るというのがグラムシの議論である。

したがって「ヘゲモニックな男性性」もまた、家父長制への人々の馴化をもたらす、男性の多様性を縦断した「大衆的な」男らしさ認識にもとづく支配の正当視として、理解されねばならない。「男性大衆」は想像的なものである。「男性大衆の実感」が存在するのではなく、ましてやそれに訴え得る語り口が本質的に存在するわけではなく、多様な男性の多様な経験に横たわる差異が棄却され「男性大衆の実感」として認識されるとき、男性性をめぐるヘゲモニーが成立するのである。「フェミニストの語り口」では男性には届かない、という主張には、原因と結果の転倒がある。多様な男性の多様な経験の一部には存在し得る、「フェミニストの語り口」を受容するという経験あるいは受容につながるような経験が棄却されて、「フェミニストの語り口が届かない者たちとしての「男性大衆」が想像されるのである。

もちろん大衆運動自体が否定されるものではない。ヘゲモニーの打破は、対抗ヘゲモニーの樹立でしかなし得ない。重要なのは、多様な男性の多様な経験の中にある多様な「フェミニストの語り口の届き方」を、「連鎖」（ラクラウ&ムフ 2001 = 2012）させ、親フェミニズムという対抗ヘゲモニーをいかに構築し、男性性変革運動をいかに「大衆的なもの」にし得るかにある¹¹⁾。

筆者が経験した限り、90年代の「男のフェスティバル」や女性センターのフェスティバルにおける男性運動団体主催分科会では、参加者が発話する「語り口」に対する他参加者からのクリティークは、徹底して忌避されていた。批評は「理性中心主義的」で「競争主義的」な「男性的」行為であり、語られたものを語られるままに承認しあう¹²⁾ことが推奨されていたように、筆者には体験されたのである。だがそれは果たして本当に、男性参加者たちにとってコンシャスネス・レイジングになっていたのだろうか。1章で述べた米国および英語圏の男性性研究でおこなわれたような模索、すなわち語る男性とそれを聴く男性の間に、ラポールを形成しつつもホモソーシャルに回収されないダイアローグを成立させ、語る男性の反セクシズム的エンパワーを生み出そうとすることが、あの批評の忌避の中でおこなわれていたと、言えるのだろうか。

Pini & Pease (2013) は、ホモソーシャルに回収されず反セクシズム的エンパ

ワーを生み出す男性性研究の研究者には、「inside-out」の視座での認識論が必要である、と指摘している。ひるがえって、経験は常に経験当事者には「正しく」認識されるかのような、経験の水準と認識の水準の混同あるいは経験の本質化が、当事者主義を重視する日本の男性学の最大の問題点なのではあるまいか。ふたつの水準を峻別しながらも、男性が経験をいかに親フェミニズム的に認識し得るかという認識論の議論に拘泥するあまり、オルタナティブな「男性大衆」の想像を通じた対抗ヘゲモニーの樹立の実践が後回しになりがちであるのが、米国および英語圏男性性研究の課題だとしても。

前章冒頭でも述べたように、いずれの地域の男性学・男性性研究であれ、男性運動のみならず女性学やジェンダー研究、女性運動のあり方およびその歴史的経緯など、それぞれの社会の文脈と無関係に展開することはできない。だがそれゆえに男性性研究の動向の国際比較¹³⁾は、男性性変革運動に何が必要でありどのような方向への展開が課題なのかを、可視化することができる。そして Brod (2013) が言うように親フェミニズムが根源的なものであるとすれば、男性性変革運動の抱える課題もまた、私たちが向き合うべき根源的な課題なのである。

(かいづま けいこ 岩手大学)

〈付記〉本稿は、2019年3月10日開催された、日本女性学会2019年大会シンポジウム「男性性研究で何がみえてくるか」のプレ研究会における、平山亮の報告に大きな示唆を受けていることをお断りする。

[注]

- 1) ジェンダー化された主体としての男性、あるいは男性性をめぐる研究について、本稿では日本において展開したものについては既に定着した呼称として「男性学」を用い、他地域において展開したものについては「男性性研究」と記述する。ただし CSMM においても on Men and Masculinities と並記されているように、男性性をめぐる問題を、個別の主体あるいは集団とは差し当たって切り離された、男性性という諸要素およびその複合の次元で徹底してとらえるか (on masculinities)、あるいは個別の主体あるいは集団と男性性という諸要素およびその複合との (本質的ではないにせよ) 社会文化的・歴史的な結びつきに着目するか (on men)、必ずしも論者の立ち位置は一致をみていないように本稿筆者には思われる (なお、明快に前者の立場をとる論者は、CSMM ではなく CSM という語を用いることも、付記せねばなるまい)。男性性を特定の主体・集団と社会文化的・歴史的に強く結合してきたものとみなせば、男性性の権力作用はその主体あるいは集団が持つ資源や権力の作用 (たとえば階級支配など) に還元されてしまいかねない。また、たとえば「体力がある (ので、長時間労働となる医者や大企業正社員には男性が向いている)」と「女性に較べストレス耐性に弱く、健康を損なったり自殺に走りやすい」とが、失業リスクが低く社会的威信の高い職業から女性が排除され男性がそれらを専有することの正当化に、ともに用いられるなど、ときにそれぞれ異なる男性社会集団によって (代表的に) 表象され得る矛盾する男性性諸要素が複合してい

るのが、男性性の権力作用（＝ヘゲモニックな男性性）であり、男性性を特定の主体や集団と結びつけることはこのような権力作用の総体把握の妨げになる。だがその一方で、さまざまな男性主体・集団と覇権の男性性ととの社会文化的な結合と乖離の変遷の歴史を問う必要が無いとも思われない。ヘゲモニックな男性性の歴史的再／構築に対し、さまざまにジェンダー化・セクシュアリティ化された主体・集団のいずれもが、等価に組み込まれ関与していたとは言えないであろう。筆者はこの点において、Jeff Hearn (2004) がヘゲモニックな男性性 (hegemonic masculinity) 概念に代わって提唱する「男性ヘゲモニー (the hegemony of men)」概念に可能性を感じるが、当然のことながらいかに「ジェンダー化された主体としての」という留保を付けようとも「男性 (men)」概念を用いることに批判が起こりうることも承知している。この点については十分な検討を重ねた上で、あらためて別稿にて論じることにはしたい。現時点での筆者の考えの一部をあらわすものとしては海妻 (2019) を参照されたい。

- 2) Newton が挙げているのは、以下の論考である。Harry Brod, “To Be a Man——That Is the Feminist Question,” *Men Doing Feminism*, Tom Digby ed., Routledge, 1998. Alice Jardine & Paul Smith eds., *Men in Feminism*, Methuen, 1987. Michael Kimmel ed., *Changing Men: New Direction in Research on Men and Masculinity*, Sage, 1987. Michael Awkward, “A Black Man’s Place in Black Feminist Criticism” *Men Doing Feminism*, Routledge, 1998.
- 3) Pini & Pease (2013) の他、北欧男性学会 (Nordisk forening for forskning om menn og maskuliniteter) の学会誌 *NORMA: International Journal for Masculinity Studies* の vol.10 の特集が参考になる。
- 4) 近年はさらに、男性学研究センター等をつくり、男性性研究として独立した教育カリキュラムを形成する方向もみえている。現時点で筆者が確認したものとして、米国の NY 大学 Stony Brook 校の Center for the Study of Men and Masculinity, デンマークの Aalborg 大学の CeMAS (Centre for Masculinity Studies) があるほか、男性性研究専攻をもうけている大学としていずれも米国の、Akamai University (ハワイ), Hobert and William Smith Colleges (NY), University of Pennsylvania (ペンシルバニア) がある。また高校等も含めて、男子学生に対する親フェミニズム教育に携わる者のネットワーク (NPO) として Menteach (1979 年にミネソタで発足, HP は <http://www.menteach.org/>) がある。
- 5) engaging は、2009 年にリオデジャネイロで開催された “Global Symposium on Engaging Men and Boys in Gender Equality” を契機に NPO 国際ネットワーク MenEngage が結成されて以降、UN Women などとも連携した人間開発支援の文脈を中心に使われていくようになる。Casey et al (2013), Menengage (2014), 海妻 (2016) などを参照されたい。また代行主義批判との関連では Duriesmith (2017) も示唆に富む。
- 6) 筆者自身、海妻 (2005) 以降に男性労働の非正規化問題を様々な論考で取り上げることで、英国の Achilles heal グループのような、労働運動と男性性変革運動の結合可能性を探りたいと考えて来たが、本稿でも言及したような明確な profeminism の男性性変革／労働運動は依然日本では出現できていないと考えている。また、多賀 (2019) の言う「2000 年代における運動の停滞」が生じた要因のひとつに、男性学の担い手たちの間における、インターセクショナルリズムあるいは男性 (運動) 主体の脱ヘテロ・シスジェンダー化に対する温度差もあったと、仄聞している。とはいえこの問題については、本稿 4 章で述べたような立ち位置から男性学を「見てきた」筆者の印象や経験で語るのではなく、必要な史料やエビデンスを収集しそれをもとに日本の男性変革運動史として論じねばなるまい。十分な収集のできていない現時点では、この問題を深くは論じられないことをお断りしたい。
- 7) 注 2 でも挙げた “To Be a Man or Not to Be a Man——That Is the Feminist Question,” を

指す。

- 8) 日本の男性学においては、「制度と個人の相互行為的構造」について論じるときはもっぱら Connell 理論のみが依拠されがちであるが、Berggren (2014) や、唯物論的な議論(制度論的な議論を含む)と言説論的(あるいはポスト構造主義的・フーコー的)な議論の架橋についての Hearn (2014) も参照のこと。本稿2章で論じた日本の批判研究の男性研究者のパターナリズムも影響してか、上野千鶴子と江原由美子の間のいわゆる「文化主義論争」以降、日本において唯物論(materialism)とフェミニズムの理論的接合についての関心が急速に薄れ、そのことが日本の男性学における前掲 Hearn のような議論への関心の希薄さにもつながっているように思われるが、残念でならない。
- 9) たとえば多賀(2019)における以下のような言及。「厚生省が父親の育児参加啓発のため「育児をしない男を、父とは呼ばない」というキャンペーンをおこなったときも、私は当時から「そのような言い方で男が育児参加しようと思うだろうか」と疑問を感じていました。つまり男女共同参画政策が本格的に始まったものの、そのほとんどは政策担当者目線か女性目線からのものであり、当の父親や男性自身の心には響いていなかった」(p.23)。
- 10) この意味において、フェミニスト男性研究が明らかにするべきものを澁谷(2001)が「男性共通の利益」としていることに、筆者は同意できない。共通の利益が存在するはずのない、多様な男性間の差異と権力関係を縦断して成立するのが、「ヘゲモニックな男性性」だからである。
- 11) したがって多賀(2019)の「女性同士の場合、そのなかにさまざまな多様性や不平等があったとしても、集団としてみれば男性に支配される側であると強調することで男性支配に一体となって立ち向かっていくことも可能でしょう。しかしマジョリティである男性がジェンダー・ポリティクスにおいてひとつにまとまろうとすると、方向性としては二つしかない。つまり男性内の差異を無視したうえで、「立場は違っても男はみんな生きづらいのだ」という側面を誇張してアンチフェミニズムへと向かっていくか、逆に「生きづらい男性たちもまた結局は女性を支配しているのだ」といつてひたすら反省するかです」(p.24)という議論は、対抗ヘゲモニーを樹立しての親フェミニズム男性性変革運動の可能性を掴み損ねているのみならず、女性運動が大衆的に成立するとしたらそれは男性憎悪を媒介にしているはずである、という、マスキュリニズム的「女性大衆」観に陥ってしまっている。90年代の男性運動の中で多賀がおこなった誠実な苦闘ゆえの「実感」であろうことを、同時代の男性運動を「見ていた」者として筆者は痛切に思うがゆえに、この「掴み損ね」もまた痛切に残念に思うことを付記したい。なお男性運動の組織的困難性については、英語圏の議論においても Peretz(2017)などの研究がおこなわれていることも、付言しておきたい。
- 12) 拙稿(2019)でも指摘したように、Jonathan Allan (2016)は男性復権運動との結びつきの強い男性性研究(New) Male Studies においては「I feel. (私は…と思う)」の多用、言い換えればある種の「感情の共同体」の構築が試みられていると指摘している。語り方のあり方とそれを通じた共同性の構築は、ジェンダー・ポリティクスにおいてきわめて重要な意味をもつ。他方で、「ラディカルな性支配の現場から、あらためて、現在の「男」たちの認識と生を内省的に問い返すべきではないか」(p.109)と述べる一方で、「男たちのメンズリブには、男同士のピア的なケア関係が必要であり、当事者研究のための居場所が必要であり、いわば善良なホモソーシャルリティが必要ではないか」(p.114)とも述べる杉田俊介(2019)をはじめとして、日本では男性運動での語りを通じた共同性構築を肯定的に捉えようとする傾向が強くなり、「inside-out」のような認識論的脱構築についての議論が見られにくい、あるいは感情共同性の脱構築を加害者性・被害者性への向き合いの時間軸ずらしの問題として捉えがちであることを、指摘しておきたい。

親フェミニズム的に聴き取り大衆的に運動する：米国・英語圏男性性研究と日本男性学の研究動向比較からみる男性性変革運動の課題

- 13) 英語圏以外の男性性研究の動向は、現時点では十分に分析がおこなわれておらず、その結果本稿の議論は、日本の男性学の動向と英語圏の男性性研究の動向の対照性を過度に強調するものとなってしまっている。英語圏以外の男性性研究や男性学の動向としては、スウェーデンに関しての Hearn et al. (2013), フランスに関しての Gregory & Milner (2011), 海妻 (2017), ドイツおよびドイツ語圏に関しての Kastein (2016), Buschmeyer & Lengersdorf (2016), イタリアとスペインに関しての Nardini (2016) などがある。

[参考文献]

- 足立区女性総合センター編 1993『男性改造講座 男たちの明日へ』ドメス出版。
- Allan, Jonathan A., 2016 Phallic Affect, or Why Men's Rights Activists Have Feelings. *Men and Masculinities*, Vol. 19 (1), SAGE, 22-41
- 安東由則 2016「アメリカにおける女子大学の動向 (1) ——19世紀から1970年代まで——」『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』第46号, 83-102
- Berggren, Kalle., 2014 Sticky Masculinity: Post-structuralism, Phenomenology and Subjectivity in Critical Studies on Men. *Men and Masculinities*, Vol. 17 (3), SAGE, 231-252
- Brod, Harry, 2002 Studying Masculinities as Superordinate Studies, *Masculinity Studies and Feminist Theory*, Judith Kegan Gardiner ed., Columbia University Press, 161-175.
- 2013 Men's Studies: A Retrospective View *The Journal of Men's Studies*, Vol.21 (1), SAGE, 49-61
- Buchbinder, David., 2013 *Studying Men and Masculinities*, Routledge
- Buschmeyer, Anna and Lengersdorf, Diana., 2016 The differentiation of masculinity as a challenge for the concept of hegemonic masculinity. *NORMA: International Journal for Masculinity Studies*, Vol.11 (3), Taylor & Francis, 190-207
- Casey, Erin A., Carlson, Juliana., Fraguera-Rios, Cathlyn., Kimball, Ericka., Neugut, Tova B., Richard M. Tolman, and Jeffrey L. Edleson., 2013 Context, Challenges, and Tensions in Global Efforts to Engage Men in the Prevention of Violence against Women: An Ecological Analysis. *Men and Masculinities*, Vol.16 (2), SAGE, 228-251
- Durriesmith, David., 2017 Engaging men and boys in the Women, Peace and Security agenda: beyond the 'good men' industry. *LSE Working Paper Series*, (<http://www.lse.ac.uk/women-peace-security/assets/documents/2017/wps11Durriesmith.pdf>, 2019年3月30日閲覧)
- 江原由美子 1988『フェミニズムと権力作用』勁草書房
——2000『フェミニズムのパラドックス——定着による拡散』勁草書房
- Gardiner, Judith K., 2002 Introduction *Masculinity Studies and Feminist Theory*, Judith Kegan Gardiner ed., Columbia University Press, 1-29
- Garlick, Steve., 2017 The Return of Nature: Feminism, Hegemonic Masculinities, and New Materialisms. *Men and Masculinities*. (Online : <https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/1097184X17725128>) SAGE. (邦訳：ステイーヴ・ガーリック 2019「自然の再来」清水知子訳『現代思想』第47巻第2号, 青土社)
- Gregory, Abigail., and Milner, Susan., 2011 What is “New” about Fatherhood? : The Social Construction of Fatherhood in France and the UK. *Men and Masculinities* Vol.14 (5), SAGE, 588-606
- Griffin, Penny., Parpart, Jane L. and Zalewski, Marysia., 2013 Men, Masculinity, and

- Responsibility, *Men and Masculinities.*, Vol.16 (1) , SAGE, 3-8
- 橋本鉦市 2001「アメリカにおける大学教員——90年代の変容を中心として——」『学位研究』15号, 大学評価・学位授与機構, 25-37
- Haywood, Chris., Mac an Ghail, Mairtin., 2003 *Men and Masculinities: Theory, Research and Practice*. Open University Press
- Hearn, Jeff., 2004 From Hegemonic Masculinity to the Hegemony of Men. *Feminist Theory*, Vol.5 (1) , SAGE, 49-72
- Hearn, Jeff., Nordberg, Marie., Andersson, Kjerstin., Balkmar, Dag., Gottzén, Lucas., Klinth, Roger., Pringle, Keith., and Sandberg, Linn., 2012 Hegemonic Masculinity and Beyond: 40 Years of Research in Sweden. *Men and Masculinities*, Vol.15 (1) , SAGE, 31-55
- Hearn, Jeff., 2014 Men, Masculinities and the Material (-) discursive. *NORMA: International Journal for Masculinity Studies*, Vol.9 (1) , SAGE, 5-17
- Heasley, Robert., 2013 Twenty Years and Counting: The Relevance of Men's Studies in a Gendered World. *The Journal of Men's Studies*, Vol.21 (1) , SAGE, 9-13
- 伊藤公雄 1993『〈男らしさ〉のゆくえ 男性文化の文化社会学』新曜社
- 1996『男性学入門』作品社
- 2019「男性学・男性性研究 = Men & Masculinities Studies 個人的経験を通じて」『現代思想』第47巻第2号, 青土社, 2019
- Jones, Mark. 1996 Men and Feminist Research, *Gender and Qualitative Research*, Jane Pilcher and Amanda Coffey eds., Routledge, 131-148
- Kahn, Jack S., 2009 *An Introduction to Masculinities*, Wiley-Blackwell
- 海妻径子 2005「対抗文化としての〈反「フェミナチ」〉——日本における男性の周縁化とバックラッシュ」『インパクション』147号, インパクト出版会, 56-65
- 2016『ゆらぐ親密圏とフェミニズム グローバル時代のケア・労働・アイデンティティ』コモンズ
- 2017「フランスにおける男性運動および男性性研究の動向」『女性学 (日本女性学会会誌)』25号, 新水社, 104-115
- 2019「CSMM (男性 [性] 批判研究) とフェミニズム」『現代思想』第47巻第2号, 青土社, 92-104
- Kastein, Mara., 2016 Self-Representations of Gender-Equality-Oriented Men's Organizations in Austria, Germany, and Switzerland: A Website Analysis. *The Journal of Men's Studies*, Vol.24 (3) , SAGE, 259-276
- 加藤典洋 1997『敗戦後論』講談社
- 川口遼 2008「男性学における当事者主義の批判的検討」『Gender and Sexuality Journal of Center for Gender Studies』ICU
- エルネスト・ラクラウ, シャンタル・ムフ 2012『民主主義の革命——ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』ちくま学芸文庫 (原著: Laclau, Ernesto. and Mouffe, Chantal., 2001 *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, Verso)
- Landreau, John C. and Murphy, Michael J., 2011 Introduction to the Special Issue—— Masculinities in Women's Studies: Locations and Dislocations. *Men and Masculinities*, Vol.14 (1) , SAGE, 132-134
- Longwood, Merle., 2013 AMSA at 20: Where Have We Been? Where Shall We Go? : Perspectives from Long-Term Participants. *The Journal of Men's Studies*, Vol.21 (1) , SAGE, 3-8
- McDonald, Terrance H., 2018 Conceptualizing an Ethology of Masculinities: Do We Know What

親フェミニズム的に聴き取り大衆的に運動する：米国・英語圏男性性研究と日本男性学の研究動向比較からみる男性性変革運動の課題

- Masculinities Can Do? *Men and Masculinities*, Vol. 21 (1), SAGE, 56-71
- Mellström, Ulf., 2015 Difference, Complexity and (Onto) epistemological Challenges in Masculinity Studies. *NORMA: International Journal for Masculinity Studies*, Vol.10 (1), Taylor & Francis, 1-4
- Nardini, Krizia., 2016 Men's Networking for Gender Justice: Thinking Through Global/Local Strategies Starting from the Italian and Spanish Cases. *The Journal of Men's Studies*, Vol.24 (3), SAGE, 241-258
- Newton, Judith., 2002 Masculinity Studies: The Longed for Profeminist Movement Academic men? *Masculinity Studies and Feminist Theory*, Judith Kegan Gardiner ed., Columbia University Press, 176-192
- 西川祐子・荻野美穂編 1999『共同研究 男性論』人文書院
- 荻野美穂 2002『ジェンダー化される身体』勁草書房
- Peretz, Tal., 2017 "We're Not Equipped": The Paradox of Intersectional Failures in the Formation of Men's Gender justice Groups. *The Journal of Men's Studies*, Vol.26 (3), SAGE, 284-304
- Pini, Barbara. and Pease, Bob., 2013 Men, Masculinities and Methodologies, AIAA
- Reeser, Todd., 2010 *Masculinities in Theory: An Introduction*, Wiley-Blackwell
- Reeser, Todd W., and Gottzén, Lucas., 2018 Introduction: complicating the emotions of men and masculinities. *NORMA: International Journal for Masculinity Studies*, Vol.12 (3-4), Taylor & Francis, 185-186
- Robinson, Sally., 2002 Pedagogy of the Opaque: Teaching Masculinity Studies. *Masculinity Studies and Feminist Theory*, Judith Kegan Gardiner ed., Columbia University Press, 141-160
- 齋藤圭介 2011「男性学の担い手はだれか」『上野千鶴子に挑む』千田有紀編, 勁草書房, 58-87
- Salah, Hakim Ben., Deslauriers, Jean-Martin., and Knusel, René., 2017 "Proposing a New Approach to the Research on Men's Organizations". *The Journal of Men's Studies*, Vol.25(1), SAGE, 92-111
- Scmitz., Rachel M., and Haltom Trenton M., 2017 "I Wanted to Raise My Hand and Say I'm Not a Feminist": College Men Use Hybrid Masculinities to Negotiate Attachments to Feminism and Gender Studies. *The Journal of Men's Studies*, Vol.25 (3), SAGE, 278-297
- 千田有紀『日本型近代家族』勁草書房, 2011
- 澁谷知美 2001『『フェミニスト男性研究』の視点と構想——日本の男性学および男性研究批判を中心に』『社会学評論』51 卷 4 号, 日本社会学会, 447-463
- Sommer, Vicki., 2013 AMSA at Twenty——A Women's Journey. *The Journal of Men's Studies*, Vol.21 (1), SAGE, 34-46
- 杉田俊介 2019「ラディカル・メンズリブのために」『現代思想』第 47 卷第 2 号, 青土社, 105-116
- 多賀太 2002「男性学・男性研究の諸潮流」『日本ジェンダー研究』5 号, 日本ジェンダー学会, 1-14
- 2019「日本における男性学の成立と展開」『現代思想』第 47 卷第 2 号, 青土社, 21-33
- 高橋哲哉編 2002『〈歴史認識〉論争』作品社
- 田中俊之 2009『男性学の新展開』青弓社
- 2019「男性学は誰に向けて何を語るのか」『現代思想』第 47 卷第 2 号, 青土社, 34-44
- 豊島区立男女平等推進センター編 1994『男が語る家族・家庭』ドメス出版
- 上野千鶴子 1990『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店
- 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店

- 「「オヤジ」になりたくないキミのためのメンズリブのすすめ」1995 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編, 天野正子編集協力『日本のフェミニズム 別冊 男性学』岩波書店, 2-37
- 2002『差異の政治学』岩波書店
- 2011「上野千鶴子による応答 I・古証文を前にして」『上野千鶴子に挑む』千田有紀編, 勁草書房, 110-137
- 渡辺和子・金谷千慧子・女性学研究ネットワーク編 2000『女性学教育の挑戦 理論と実践』明石書店
- Wiegman, Robyn., 2003 Unmaking: Men and Masculinity in Feminist Theory. *Masculinity Studies & Feminist Theory: New Directions*, Judith Kegan Gardiner ed., Columbia University Press, 31-59

Listening with Profeminist Attention, Appealing to the Multitudes: Japanese Men’s Movement’s Tasks Introduced from the Differences between Men’s Studies in Japan and CSMM in English-Speaking Areas, Especially the US

KAIZUMA Keiko
(Iwate University)

Since the 1990s, CSMM has been studied systematically at universities in English-speaking areas, and especially in the US. CSMM focuses not on the sameness, but instead on the differences and power relations, between male CSMM scholars and their male subjects of research or male students. CSMM is so deeply affected by feminism that it aims to “empower” its subjects and students to progress toward anti-sexism, not to “relieve” male victims of sexism.

However, the field of Japanese men’s studies is developing as “studies on, by, and for men,” emphasizing its role as a kind of “study by insiders.” To combat Japanese male scholars’ paternal and dominant attitudes toward their female subjects of research, such “insider studies” were recommended by feminists—not only by male scholars. Unfortunately, Japanese men’s studies and movements have failed to be profeminist because of their too-great emphasis on “men’s own feelings of victimization” and the dualism of the oppressor/victim relationship. Men feel the need to criticize the dualism question of priority, either leading to men’s apologies or men’s liberation, and the essentialism of “men’s own feelings” as a part of hegemonic masculinity.

Keywords: Empower, Hegemony, Masculinity, Profeminism